● 講

演 ●

Lecture

図書館と図書館職員

— 機会の把握とそれへの挑戦 —

Libraries and librarians

— Opportunities and challenges —

ウェルシュ, ウィリアム J.*

* WELSH, William J.

1940年ノートルダム大学卒業。1941年米国空軍輸送司令部アラスカ地区本部に図書館員として勤務。'47年米国議会図書館に入り、発注部発注課、整理局発注課長、管理局次長、整理局長などを歴任。'76年2月より副館長。'88年10月退職。議会図書館整理局での独創的なリーダーシップと図書館等に対する積極的かつ広範囲におよぶ貢献により、'71年アメリカ図書館協会年次大会にてメルヴィル・デューイー賞受賞。'84年ノートルダム大学名誉法学博士号、専門図書館協会名誉会員。'88年シシガン大学情報図書館研究学部名誉会員。IFLA関係など図書館分野における顕著な功績で、国際的に著名であり、図書館分野で数多くの寄稿がある。

[抄 録] 金沢工業大学ライブラリーセンター主催の'89国際セミナー「変革が求められる研究調査図書館—経験が語る将来のマネージメント」の基調講演の収録である。研究図書館の目指すべき方向は専門図書館になることであり、単独でニーズに添うことは難しく、ネットワークキングが極めて重要であると述べる。またネットワークの第一の要件は、中央に整備された書誌コントロールシステムがあり、データベースがあることと説く。さらにディスカッションで、図書館と図書館職員が持つべき知識や能力、技術について、今後目指すべき方向をさぐる。

[キーワード] 研究図書館、専門図書館、ネットワーク、書誌的コントロール、ライブラリアン、サブジェクトライブラリアン

[Abstract] This is a record of the key-note speech at the '89 International Seminar titled "Managing for the Future-Library in Transition", which was held by Library Center, Kanazawa Institute of Technology on July 8-10, 1989. Lecturer states that research libraries should aim at becoming special libraries, and that networking is greatly needed because it is almost impossible for each library to meet its own needs by itself. The first prerequisite for a network is the presence of a system of bibliographic control which is maintained centrally and a database, he explains. Following this speech, discussion was made on the knowledge, ability and technique which libraries and librarians should acquire in considering the future of research libraries.

[Keywords] research library, special library, network, bibliographic control, librarian, subject librarian

この講演は、平成元年6月8日(木)~10日(土)、金沢工業大学ライブラリーセンターの主催により、同センターで開催された'89国際セミナーの基調講演を収録し、編集したものです。

研究図書館の目指す方向は専門図書館

これから3日にわたるこの国際セミナーでは、今日研究図書館が直面する機会や課題の幾つかに焦点が当てられることになるでしょう。

情報の急増が近年問題となっており、我々が望むように利用者に奉仕できないことの、大きな原因であるとする人が多くおります。しかしながら、我々の中には根本的な問題はノンインフォメーション、非情報の急増であったとする人もいます。すなわち、情報を知識に、知識を英知に転換するという作業は膨大な量の非情報、つまり我々の知識追求に何ら関係のないデータがあるために、一層難しくなっているというわけです。

確かに日増しにふえ続ける多量のデータがあること自体問題であるとしても、私の判断では、関連のないデータがあるということこそ、所蔵の管理というより所蔵していくことが問題となるのであり、これがジレンマの原因です。

確かに研究図書館が目指している、ないしは目指すべき方向は、多くの研究図書館がまだ気づいておりませんが、専門図書館になることです。各研究図書館が自分の館だけでニーズに沿うことはもはや経済的に見合いませんし、できないことです。どんな図書館もあらゆる人々に対してすべてを提供することはできず、より大きな全体の一部すなわちネットワークの一部とならなければなりません。といっても、このゴールさえも我々の背負っている大きな伝統ゆえに、容易には達成できません。つまり、我々が現在していることの多くは、過去にしたことゆえに存在するからです。

ネットワークが極めて重要

研究図書館の将来を考えると、我々はその目的を思い出さなければなりません。研究図書館は、ただ展示でその所蔵品を部分的に展示する博物館ではありません。また、ほとんど利用できないような資料の倉庫となってもなりません。研究図書館は、ある特定機関における研究に絶対必要な資

料を提供しなければならないサービス機関なのです。これを達成するためには、その図書館の蔵書は書誌的に整理され、その機関の学者やネットワークを通じて、その他の学者も検索できるように、また逆にその図書館にない資料はネットワークによって利用可能なようにしなければなりません。

ついでながら、インターライブラリーローン、図書館間貸借は学術研究をするのには常に重要な要素でしたが、現在では電送によって図書館間貸し出しが一つの手段となり、極めて強力になってきておりますので、私たちのコレクションやサービス政策の変更に当たっては、これを十分考慮しなければなりません。米国の東海岸の図書館が必要とする資料を、東海岸のほかの図書館よりも英国貸出図書館からの方が、ずっと迅速に利用できると言われてきています。

我々にとって利用できる最大の機会は、主としてコンピュータの力によるネットワーキングです。この機会を最大限に利用するのに必要なものは考え方の転換です。我々は相互依存という概念を生み出し、深めていかなければなりません。議会図書館はずっと前に、研究図書館が必要とする巨大な量の資料を収集することはできないことを認識し、そしてその目録の内容も要求の基準を満たしてはおりませんでした。

ネットワークにとって第一に欠くことのできない要件は、中央に整備される書誌コントロールシステムがあることで、ネットワークの参加者が入力を提供します。そして、このデータベースはネットワークの参加者に対し、何を収集し、目録をとり、維持しそして保存するかを決定する機会を提供してくれることになります。最終的には中央に整備された全国データベースがあり、そしてそれぞれの所蔵は分散的に収集・保存されることになるでしょう。

研究者たとえば著名な歴史学者であるバーバラ・タックマンのような研究者ですと、単一の図書館の範囲内では、自分の主題を研究し尽くすことができないことを十分認識しております。そして、ネットワーク内の他の図書館のデータベース

をも自由に利用しております。そして、これが党史の研究能率を、このように拡大したアクセスによって非常に高めていることは明らかです。

ネットワーキングによって我々はいろいろなコストを回避することができます。またそうあるべきです。もし我々がニーズに沿うことに役立つネットワークに依存できるなら、収集、目録作業や保存の費用を削減することができます。そして最も重要なことは、新しい図書館スペースの建設に要する費用を、一時的に延ばすことができるということです。

現在考えられている他のどの機関とも恐らく異なるでしょうが、研究図書館は新しい収集物を所蔵するための増加スペースが必要になります。もしも資源を共有し、現にあるコレクションを小型化するならば、資本コストが削減でき、恐らく利用者に対するサービスも改善することができるでしょう。

蔵書構成のカギは確固たる収集政策

しかし我々の最も困難な責任の一つは、明らかに即時対応できるコレクション開発の調整と実施です。国立図書館にとって、国内資料と外国資料の収集に関する責任は極めてとらえにくいものでした。世界のあらゆる地域からの、あらゆる言語の、しかもあらゆる主題の総合的な蔵書構成をつくり上げることは事実上不可能ですし、また現実的でもありません。

国家的レベルで、かつ均整のとれた蔵書構成を成功させるには、確固たる収集政策とその政策を実施していく専門家が存在していなければなりません。このような目標が今日、世界のどこかの図書館で十分に満たされているという証拠は、ほとんど見当たりません。国のレベルでのこの仕事は、国立図書館と利用者との定期的な相互情報交換がないために、特に難しくなっております。大学の研究図書館であると、教授たちと頻繁に連絡する利便がある一方で、世界的コレクションを集約的に求める学者たちによって突きつけられる飽くこ

とを知らない要求に、悩まされてしまいます。

この点について専門図書館は世界じゅうで最も無事に過ごし栄えていると言えます。その理由は、専門図書館は恐らく利用者から極めて明白な要求を受けているからです。

数年前ゼネラル・モーターズの中にある幾つもの専門図書館を訪問する恩恵に浴しましたが、これらの図書館の委託権限は極めて明白であると結論を得ました。いささか大げさかもしれませんが、正鵠を射たものだと思います。また、過去10年間国立医学図書館の理事会に席を連ねておりました私は、この図書館をあらゆる図書館のロウルモデルとして特徴づけることができると思いました。というのも、この図書館の利用者たちは多種多様ですが、皆医療にかかわっていて、図書館職員と利用者の間には、相互に活発な情報交換があるからなのです。

専門図書館の中には、典型的な研究図書館が持っていない潜在的な利点、つまり適応性のある蔵書構成開発政策を持っているところがあります。例えば日産が数種類の四輪駆動のモデル車の生産を決定したとしますと、日産の図書館はこの試みを支援すべく、あらゆる関連のデータを収集します。しかしモデルチェンジが完了するか、あるいは研究が中止された場合、新しい企画に基づく、前のものとは違った特徴を持ったプランについてのデータに関する新しい資料を受け入れるために、これまで収集された関連のないデータを廃棄することができるでしょうか。これが問題です。

収集資料の相対的なレフリーも

我々は、科学技術の進歩を有効に利用するために、以前にも増して一層努力しなければなりません。新しい技術をニーズに適合させることで今まで多くの成功をおさめたものの、悲しいことに専門知識を欠いていることから、数え切れないほど失敗を重ね、セールスマンの思いどおりに踊らされてきた気がします。必要なのは新しい技術開発に絶えず注目し、また、ある場合には民間分野が

いまだ利潤を上げられることを知らない市場を指定し、研究する組織をつくり上げることだと思えます。

オートメーションの初期のころには、我々は自動化されてしかるべきものよりも、自動化できるものは何でも自動化してきました。その結果として、完全に自動化された図書館はほんのわずかしがなく、この技術からはまだ十分な成果をあげるに至っていないと思います。

ここで言及したいのは、私たちのコレクションの学問的利用は今後も引き続き著者別、標題別によるでしょうが、情報の採掘が英知という貴重なものを提供してくれるのは主題別になるであろうということです。この目標達成のために、情報の相互交換の可能な主題別シソーラスがつくれ、適用されなければなりません。

これは書誌的巨人とも言うべき人によってのみ可能な、非常に困難な作業です。なるほど、数多くのシソーラスが開発され利用されてはありますが、これらは大体において単一の主題ないしは幾つかの関連主題に関するものです。私の知る限りでは、いかなる専門家や専門家グループも世界的規模、ユニバーサルな観点からこの問題を調査検討しているところはありません。

調査のためのいま一つの機会は分類のための領域です。最も広く利用されている分類表は書架上の所在に一番適用されていますが、強力な検索ツールとしてはほとんど使われていないのが現状です。現在は目録作成コストを下げ、書架上スペースを節約することによって、新規受入資料を受入順に書架上に配架する時期ではないでしょうか。そうならば我々はひたすら検索の目的のために分類表を使うことができます。

私たちは、データベースの中の資料が利用者をして最善の選択ができるよう検討されるために、レフリーのプロセスをもっと広く採用する必要性を考えるべきだと思います。もちろん私は、この考えのもたらす損失と危険性を多少理解してはおりますが、もし私たちがこの責任を躊躇するなら、私たちは学問を最大限に支援できるかどうか疑問

に思います。つまり、私たちが何を収集すべきかについて日々判断を下しているのであれば、さらに一步進めて、私たちが今まで収集したものの相対的な重要さをも決めて構わないのではないかと思います。

図書館員は学者でなければならないのか

研究図書館の役割を考えると、図書館職員が知識追求にもっと積極的な役割を果たすべきかどうか、私はしばしば疑問に思ってきました。

自然保護に非常に関心を持ち、個人的には日焼けに悩んでおりますので、私は「温室」効果、“green house” effect という問題について多くの本を読みました。また最近では、南極での出来事に類似の北極のオゾン層にもオゾンホールがあるらしいということで脅かされてきました。ここにお集まりの皆さんの中のどなたかが、この問題に関するすぐれた資料の多くがどこにあるかご存じでしょうか。この質問に答えてくれるような書誌的ツールもしくは検索ツールはあるでしょうか。そしてまたあらねばならぬのでしょうか。

熱帯太平洋の地域で記録の低温だった 1988 年の後半 7 か月は、世界的に低温だったということは事実でしょうか。それとも逆に機器測定の実史の中で最も暑かった 5 年間は、1980 年代であったということは事実なんでしょうか。このようなデータを適当な図書館が所蔵すべきかどうかということが問題なのではありません。そうではなく、私たちは我々の生存にとって非常に重大なデータ分析の責任を図書館人として持っているのか、これが問題です。

レファレンスライブラリアンは日々の業務を遂行するに当たり、問い合わせに答えて日常的に質の高い判断を下します。しかし、レファレンスライブラリアンが到達する結論や提供する助言は広く敷衍するものではありません。繰り返し申すならば、質問に対する回答でしか提供されないのです。

そうになると、レファレンスライブラリアンは調

査に先立って質問を待つべきでしょうか。それとも質問を前から予測し、調査の結果を公表すべきなのでしょう。図書館員は学者でなければならないのでしょうか。皆さんのご意見をお伺いしたいと思います。

私に関心を持っておりますもう一つの分野は、それぞれの研究図書館が、例えばハイパーテキストについて精通しなければならないかどうかということです。ハイパーテキストについての有益な記事が“American Libraries”の89年2月号に載っております。そこに載っているハイパーテキストの定義は、「利用者が関連の情報を資料を通じて自分のコースに載せることのできる非順次方式のコンピュータ化されたテキスト検索システム」です。ハイパーテキストは60年以来調査が行われてきてはいますが、検索にとってなかなか興味深い可能性を持つ一方で、どうも広く利用されそうもありません。皆さん、ハイパーテキストについて何かご存じですか。また、皆様の図書館に関連がありますか。

もう一つの質問は、ファックスを図書館に採用するための研究に焦点を当てねばならないかどうかということです。ファクシミリは我々の図書館ネットワークの中で重要な位置を占めていると私は確信しておりますが、今日では特異な利点の提供はありますが、広くは利用されておられません。

私の場合通常、長距離の文信、例えば議会図書館からオーストラリア国立図書館、にこれを利用してあります。これには二つ利点があります。送達が迅速であることと受理が確実であることです。また、客がファックスで食べ物注文し、受け取るために店につくと、もう注文の品の用意ができていたようなテークアウトレストランなどへの応用もあります。ファックスの家庭での利用の機会も、機器の値段が下がりつつありますので、今後ますますふえてくると思われます。

資源の共有が保存の分野に最も有効

資源の共有、これは恐らく保存の分野に最も有

効です。つまり、いかなる研究図書館も自館のコレクションを全部保存することができないのは、極めて明白になっているからです。ある特定の機関では何を残すかを決める仕事さえも不可能に近いのです。かくして単なる良識というよりはむしろ圧倒的な経済的観念が協力的なアプローチを求めるのです。

しかし、それにもかかわらず私たちはかように与えられた機会を利用し、共有が共通の利益を代表するライブラリアンシップの他の領域において、やがて保存で学んだような教訓が広く行き渡ることを願っています。

優良な研究図書館の基本的原則は次のようなものです。まず、書面にした実行可能なコレクション政策があること。すなわち図書館資料は書誌的コントロールをされなければならないこと。そして資源の共有は絶対欠かせないこと。そしてネットワークが極めて重要であるということです。

以上の考えは一般的に支持されておりますが、一方で我々がわかっていないのは、全国計画の中でこの考えをどのように扱うか、そしてまた我々の全国計画が国際的背景の中でどのように理解され得るかということです。

なるほど研究図書館の価値は以前にも増して、今日よく理解されるようになってきました。しかし、大いなる伝統の研究図書館を支えている資源は、全般的にいて妥当性を欠いていることも事実です。限られた資源によって図書館をさらに効果的に利用するために、いろいろな方法を見つけ出さなければなりません。共有の必要性を理解し、新しい技術を最も有効に活用することができるよき管理者を持っていれば、我々は成功が可能だと確信しております。

恐らくこれから数日にわたるペーパーの発表と皆さんからのご質問から、我々はこの問題をいささかでも明らかにすることができると思います。

このセミナーのオーガナイザーかつ発表者の観点から、このセミナーの成功はひとえに、ペーパー発表者と参加者との間の対話によることが大で

あると考えます。我々は皆さんと我々の経験を分かち合い、その経験に基づいた皆さんの質問にお答えするためにここに集っております。皆さんの質問を心からお待ちしております。ご清聴ありがとうございました。

ディスカッション

司会（中島秀敏：金沢工業大学） どうもありがとうございました。それではただいまのウェルシュ先生のお話についてご質問、ご意見等をお願いしたいと思います。

役割はスカラーかエキスパートか

ウェルシュ まず私の方から皆さんに質問してみたいと思います。サブジェクトライブラリアンの役割ですが、皆さん、どう思いますか。ライブラリアンはスカラー、学者であるべきでしょうか。スペシャリストをつくるべきだと思いますか。

バッティン P.（保存・アクセス委員会） この問題はアメリカでも非常に深い関心を持たれている点です。私も同感です。もっとその方向に進むべきだと私も思います。つまり、サブジェクトについての専門知識能力をライブラリーのスタッフの間で持つことが望ましいと思います。

私たちも、日本で今どういう傾向があるのかに関心を持っておりますので、ぜひ日本の皆さんから聞きたいんです。いろいろな難しい問題が実はこれには伴ってくるわけで、特にアメリカの場合ですと、大学の学者と図書館員との間で地位が違うんですね、偉さというものが。それが一つの問題です。

細野公男（慶応義塾大学） まず第一にそのスカラーという意味をどういうふうに定義するかによると思います。純然たる学者という意味ならば、図書館員が学者になるべきかどうかというのは、ある面によっては疑問が出てくるかもしれません。

しかし、いわゆるいろんな意味での研究開発と

いうことは、図書館にとって非常に重要なことだと思います。例えばこの中でもハイパーテキストという言葉が出てきましたが、新しい技術がどんどん出てくる。新しいマネジメント手法というのがいろいろ出てきます。そういうものを研究して取り込み、それを現場に生かすということは非常に重要なことだと思います。そのためには、図書館員がそれなりの知識、技術あるいは能力を必要とするだろう。そういう意味では図書館員は学者である、あるいはその方向に行くべきだと思います。

特に最近ではマルチメディアとかいろいろな言葉が使われており、図書館が持つ資料のメディアもいろいろ多様化している。そういう非常に多様化したメディアをいかにうまくコントロールしていくかということを考えると、非常に責任が強くなってきていると考えます。そういう意味からいいますと、図書館員は学者になっていくべきであると思います。

ウェルシュ 私、学者、スカラーという言葉のほかに実はエキスパート、専門家という言葉も使おうかなと思っておったんです。ただ学者と言うと狭くなりますから。私が考えている実例を挙げたいと思います。

ある図書館へ三菱の技術者がオゾンに対する一酸化炭素、自動車からの排気ガスの影響がオゾン層にあるか、ということでやってきました。そうすると、この場合どうでしょうか。そんなことをライブラリアンに質問するのはいいことなんでしょうか。どうでしょう。この実例を一つ考えてみてください。

細野 それは図書館が例えば理工学系の図書館であるならば、当然質問すべきでありますし、それに答えるべきだと思います。その他の図書館である場合には、その図書館のレベルに合わせて非常に専門的ではないかもしれませんが、そういう専門的な情報を得るためのファーストステップを与えるべきであると思います。

浜田敏郎（常盤大学） いわゆるスカラーとしてのライブラリアンというものがもしいたとし

て、一方ではユーザというのがいます。そのユーザとライブラリアンの間を狭めていく。ユーザはもっとレベルアップする能力を持つ必要があるし、今の、少なくとも日本のライブラリアンで考えれば、ライブラリアンはもっとアップしなくちゃいけない。どこまでそれを狭めていくかということが、これからの少なくとも日本では大きな問題だろうと思います。

特に図書館学の教育、インフォメーション・アンド・ライブラリーサイエンスにおける教育において、まだ日本のレベルというのは、数においても質においても相当後れているところがあると思いますが、そういう人たちがふえていって、おのおの分野に入って、先生の言われるサブジェクトライブラリアン、ほかの学位、ほかのドクターをとって、しかもライブラリー・アンド・インフォメーションサイエンスをやった人というふうになっていけば、非常に理想に近づきますが、それを私たちはスカラーと呼ぶか、先生が先ほど言われたスペシャリストと呼ぶか。

医者を考えても新しい医療機器、新しい薬品がどんどん出てくる。そのインフォメーションはライブラリアンがやるか、その医療機器の専門家あるいは医薬の専門家がやるか。そういう問題に関連があるんじゃないかと思います。

ウェルシュ いや、その両方、どちらの場合もあっていいと思うんですね。ちょっとここではスカラー、学者という言葉はやめましょう。で、エキスパートという言葉を使いましょう。ある分野についてある程度専門的な知識を持っており、ある程度の理解の水準でコミュニケーションを助けることができる人という意味で、エキスパートを使うことにしましょう。

現存のライブラリアンというものはユーザに対して役に立たなくちゃならない人です。そこで、関係のない情報が非常にたくさんある場合に今よりもよい仕事をするためには、ライブラリアンとしては、まあ究極的な答えはまだ得られないかもしれませんが、おっしゃるようにユーザとライブラリアンの間でもっとコミュニケーションを改善

しなければならぬ。そういうことを志向するライブラリアンであってほしいですね。

室伏武(亜細亜大学) 今お話がありましたが、細野さんと浜田さんにも質問したいと思います。サブジェクトライブラリアンの場合の問題が二つあると思うんですが、一つは技術とか方法論としてのスペシャライズされた知識なり技能なりを持つことがあると思います。

こういう問題については現状でもライブラリースクール等で、ある程度の解決はできるんじゃないかと思いますが、内容に関する問題に関して、一体我々は、内容の面について、専門領域の学者と同じような意味の能力を持つのか、我々図書館員としてそれとはまた違った領域というか、違った能力を持つのか、その辺、非常にあいまいとしていますし、また我々はそれを果たして持てるだろうかという問題を持っているんじゃないかと思っています。

もう一度申しますと、内容面に関していわゆるそれぞれの専門分野の学者の持っているような知識を我々に要求されるのか、また我々は必要なのか、いや、我々自身でそういうそれぞれの専門領域の内容についてアプローチができるような何か方法なり一つの道があるのではないのか、というようなことについて質問したいと思います。

ウェルシュ この問題はもう少しこれを解明してみたいと思いますが、学者と肩を並べてという考え方は不幸だと思います。それは肩を並べて競争しようというんじゃなくて、ユーザの立場に立って、学者を補完する、補足する役割でしょうね。

ということは、図書館を使う人全部が学者かというところでもないわけで、多くの場合、図書館にもスペシャリストがいて、時にはユーザよりもすぐれた専門知識を持っているかもしれません。しかし、そもそも情報があり過ぎるのですから、その中からふり出して、必要な、一番役に立つと思われる情報、適切なデータを需要者に提供する、それでよいのではないのでしょうか。

サブジェクトライブラリアンの必要性

司会 私どもも、この金沢工業大学でサブジェクトライブラリアンとして、実際に経験を持ちまして実務をやっている立場から、そういうことを少しお話ししたいと思います。

私個人の意見としましては、私は自分の専門からいえばエンドユーザであって、どちらかと言えばライブラリアンではないような気がしておりますが、仕事ということでSLすなわちサブジェクトライブラリアンをやっております。

私どもの組織には各学科、デパートメントから選ばれたサブジェクトライブラリアン、SLがいるという組織構造のほかに、ライブラリースタッフ(LS)があります。私どもの大学では、サブジェクトライブラリアンとライブラリースタッフとが組み合わさって、ライブラリアンとして一つの組織を形づくっております。そういう意味から、私どもで長い間経験しておられます、笠先生はその室長ですので、ご意見をお伺いしたいと思うんですが、いかがでしょうか。

笠覚暁(金沢工業大学) 金沢工業大学でSLを担当しておりますが、今おっしゃいましたことで、ちょっと感想を述べさせていただきたいと思います。

要するに、今は確かにライブラリーのいろいろなテクニックなどが非常に複雑になってきて、しかもメディアが物すごく多様化してきていることは事実です。そうしますと、そういういわゆるライブラリーサイエンスのエキスパートというのが、どうしてもやっぱり図書館には必要なわけです。

それと同時にライブラリーはその資料を持ってユーザにサービスしなきゃいけない。特に我々のような大学図書館では、そのユーザというのは現実のプロフェッサーであったり、あるいは大学院生であったり、非常に情報要求が高度になってくるわけです。そういうときに指導するに当たって、例えばライブラリーサイエンスのみの専門家、エキスパートがその資料のサービスをできるかとい

うと、必ずしもそうではない部分があります。

そういう情報の内容にまで立ち入って、情報のエバリュエート、評価をして、それをサービスするという局面では、どうしてもそのサブジェクトに通暁したような新しい型のライブラリアンが必要なんだろうと思っています。

そして、そういう情報を提供するとき、もちろん最新のライブラリーサイエンスの知識も要求されます。これだけメディアが多様化してきているわけですから、それをある程度使いこなせないと、そういうサービスはできない。そういう意味で、ある意味では一つの専門分野のサブジェクトにそれこそいわゆる学者並みの理解を持った能力、そういうものを持ったサブジェクトライブラリアンが、同時にライブラリーサイエンスの最新知識も持っているというのが望ましいわけです。しかし、二つを両方完全にはできませんから、どちらかと言えば、そのタイプのライブラリアンはサブジェクトの内容把握の方に重点を置く。

それからもう一つ、一方でライブラリーサイエンスが非常に発達するわけですから、そちらの方に重点を置いたライブラリアンというのがまた、館に必要なわけです。その両者の協力関係に立って新しい研究図書館というのが運営されていかなければいけないんじゃないかと思っています。

ウェルシュ そういった分析的考え方に賛成です。分野によっては既に、例えばミュージックライブラリアンというのができていますし、医学ライブラリアンもそうですね。医学の用語について相当詳しく知らなければなりません。また、1年間の図書館学の勉強だけでは今日の図書館が要求されていることすべてを学ぶことはできないんです。

例えばオートメーションについてもある程度知らなければならない。経営についても知らなければならない。それからブリザベーション。こういった分野が今非常に大事になってきておりまして、未来のライブラリアンは非常に多面的な人間であり、さまざまな主題についてある程度同じように対応できる人であってほしいと思います。

水先案内ができる知識も必要では

東ヶ崎民代(国際文化会館) 今のお話を伺い、私どもの経験から非常に印象的な話をしたいと思っています。私どもの図書室は日本研究の図書室でございまして、結論を先に言いますと専門図書室に働いているライブラリアンはもちろん既にサブジェクトライブラリアンというか専門家であると思っています。日本研究ではソーシャルサイエンスからヒューマニティーズまで非常に広い範囲にわたっております。そして、私どもがとても頼られるのは、そういうような領域をつなぐ役目をするときです。

ですから、ライブラリアンというのは、全部非常に詳しく知っている必要はないんですが、あらゆる領域でどういう人が何をしているかを知っていると非常に頼られる。

そういう意味で、ある程度は知識を持ってなくちゃならないんですが、深く狭く知らなくてもいい、広い知識を持っていることで特徴がつけられる職業だと思います。ですから、ライブラリアンは学者よりもアップパーハンドがあるという考えでございまして。

ウェルシュ ちょっと私、意見が違うんですね。例えば医学図書館、法律図書館などの特別な図書館ですと、一番我々の職業で能率的な人というのはどうしてもスペシャライズしてくるわけです。大きな研究図書館でもそこですべてのニーズを満たすだけの資料を集めることはできません。それ

を集めてカタログをつくって、そしてそれをとっておくということが精いっぱいなんです。

いわばネットワークの雰囲気の中に我々は働いているんです。お互いに目標に向かって、例えばある特殊なトピックはあのAの図書館に行けばいいんだ、あのA図書館に行けば専門家のスタッフがいるということがわかっていればいいんです。特に特定分野にスペシャライズするというより、そのあるテーマについてほかの人よりちょっと知識を持っている、ほかの図書館にいる人よりこの図書館の人が余計知識を持っている、それでいいんです。

東ヶ崎 私が申ししておりましたのはコレクションについてじゃなくて、もちろんそういう非常に細分化されている知識を持つことはとても専門図書館員でも無理ですが、特にインターディシプリナリースタディーズの場合は、私どもの日本というものを中心に考えた場合はゲートキーパーというんでございますか、そこがやはり私どもが水先案内といえますか、外国から見えた研究者をほかのライブラリーに紹介したり、それから専門家に紹介したり……。

もちろんその深いところはとても追いつきませんが、どうしていいかわからないような学者の方向づけというんでしょうか、それから資料が大体どの辺にあるか、どういう人が専門家であるか、その辺の認識をお伝えするわけで、とても深い意味での専門分野の知識を持っているとは自負しておりません。

ウェルシュ 言い返すつもりではありませんが、水先案内という言葉を私も使って私の議論を進めたいと思います。

これはお医者さんではない、しかし水先案内というのは非常に専門的な能力を持った人だということですね。自分の分野についてはよく知っている。それは確かにいいことでしょう。それは例えとしてはいいけれども、我々のやろうとすることは経済的に言ってもあんまり範囲を広げちゃいけないんです。かえってあんまり広げない方が、特定分野に深く入らない方がユーザに役に立つのです。

あなたの場合、国際会館の図書館ではちょっと特殊かもしれませんが、通常は違いますね。普通のリサーチ図書館、調査図書館系図書館でも、もういろんなことについてあまり深い特化、スペシャリゼーションということはできないと思います。確かに人からは頼られます。しかし、あまり関係ないようなものだってライブラリーにはたくさんあるわけです。そういったものを知らなければいけません。

例えばよく私が挙げる例ですが、コーネル大学にアイスランドについての大変巨大な世界最大の資料があります。ところが、アイスランド研究などはこのごろあんまり必要がなくなっているんですよ。では、その資料をどうするかという問題が出てくるんです。コーネル大学もこれは必要ないということがわかっているんです。ほかの国をもっと研究しなきゃならないということに気がついていきますから、そうすると、この部分はどこか減らしてしまおうか、ウィーディングアウトしようかということを決めなくちゃならない。これが実はこれからの問題なんですね。

ですから、我々は集めるものにもっと気をつけなければならぬ。何をカタログに入れるか、何をリザーブとしてとっておくかを決めることが、これから大きな問題になります。プリーザーページ、保存ということの目的をもう少し選択的に狭めていかなきゃならないんじゃないかと思えます。

司会 ウェルシュ先生、話がちょっとかみ合っていないんじゃないかと思いますので、私なりのインタプリターをしたいと思います。

ただいまのご質問はライブラリアンとしての資質として、いわゆるスペシャリストであるスカラ一あるいは大学の先生のような、研究をするような部門で深く細くする資質の人で、ほかにはあまり興味がないけど、そのポイントに興味のある人間が向いているのか、あるいはライブラリアンとして図書館の情報学あるいは図書館のことに精通した人が、ある程度の自然科学あるいは社会科学の分野を、少し浅いけれども精通した方がいいのかと。

それで、ご質問された方の趣旨は恐らく後者の、図書館員として育った環境の人がそういうことについて知識を得て、そしてある程度お答えができるような形で水先案内ができる方がいいんじゃないか、というお考えなのではないかと思うんですが、いかがでしょうか。

ウェルシュ 先ほどの東ヶ崎さんの場合について私は反論をするものではありません。それは一般的な図書館というよりは非常に特殊なアプローチを持っている図書館だろうと思います。

しかし、普通は私たちがやりたいと思っていることは、国際的なネットワークをつくることです。例えばイギリスのレンディングライブラリー、本を貸すための図書館、貸出図書館で例えばテレファックス、ファクシミリを使ってネットワークを作る。今日技術的には十分そういった力があるんです。ユーザに答えをファクシミリで提供できる技術があるのです。経済的に言いましても、その場合ライブラリーが専門化した方がいいんです。その方が効果的な答えを敏速にユーザに適切な、より関係のある、役に立つものを出すことができます。

アメリカでもほんの数年前まではカード式カタログでした。だれかが図書館にやってくると、自分でカードを探して、そしてその中から何かを頼んでいた。それで果たしてその人のニーズ、必要が満たされたかどうか、全然我々は構いはしなか

ったというのが数年前なんです。

ところが今はコンピュータを持っています。ですから何を知らたいのかを我々は知らなきゃなりません。というのはコンピュータの運営は金がかかるからです。実際に必要が満たされたという場合もありますが、満たされない場合もあるんです。ですからコンピュータの使い方をよく勉強した人をスタッフに持たなければならぬようになってきました。

理由としてはおかしい理由から、ひょうたんから駒のようにそうなったんですが、その結果コンピュータを勉強していることの方が、特定のテーマを勉強するよりも専門の学者の役に立つということがわかったんです。ですから、これから我々の関心の対象は、あまり関係のないデータを除去するということに向けられるべきかもしれません。

例えば自分の図書館、A 図書館で答えが出せないというのであれば、ネットワークを通じて答えが見つかるライブラリー、B を教えてあげることの方が必要です。だれかが質問を持ってきたものが私の図書館に、あなたの図書館に関係ないというようなものであっても、ネットワークに入っていれば、それについての理想的なライブラリーを紹介してあげることができるわけです。これを無視しますと、これは要するに使う人たちの役に立たず、図書館の変遷、図書館の改革に失敗すると思います。

東ヶ崎 私たちは大体同じことを言っているんだと思います。目標は同じだと思います。私が強調したかったことは、ライブラリアン、図書館員というのは専門家と言えば全く自主的な、独立した、誇りを持った専門家である必要はないという意味ですね。しかし、問い合わせはどこかに回せばいいと考えます。ですから、自分のライブラリアンとしての仕事、ネットワークに加盟しているメンバーの図書館に紹介したりすることができるような、またどこへ行ったら研究資料があるかということを見せてあげられるようなライブラリアンであればいいんだと思います。

いかに知識を使いこなすかがポイント

細野 話題がちょっと違っちゃうかもしれませんが、先ほど図書館員がどのくらいの知識を持つべきかというようなお話がありましたが、学者にしても単に知識を持っているだけでは学者ではないわけで、それをいかに使いこなすかということに意味があると思うんです。ですから、図書館員の場合も学者並みの知識を持つか持たないかということではなくて、どういうふうに知識を使いこなすかというのがポイントじゃないかと思っています。

それで、結局つかいこなすというのはどういう意味かといいますと、図書館の場合にはやはりコミュニケーションである、つまり、情報ニーズをどれだけつかめるかということに、知識がうまく使えるかどうかということがきいてくると思うんです。

ですから、そういうふうに考えればいいわけであって、どの程度の知識を持つべきであるかとか、あるいはどちら側から迫っていったらいいのか、つまり主題知識を持っていて図書館情報学をやった方がいいのか、図書館情報学をやった主題知識をやった方がいいのかというようなことは一律には決められない。これはもうケース・バイ・ケースで考えればいいと思うんです。

重要なことは、知識というものが使うためにあるというようなことで考えれば、別に問題はないんじゃないか。だから、そのためのいわゆる努力なり何なりはしなければいけないということだと思います。

ウェルシュ そうです。私も一所懸命それを言おうとしていたんです。図書館員、ライブラリアンを、情報を知識に転換する役割にして、その知識を学者に提供しようということまではちょっと必要のないことです。

竺 今のことに関連してなんですが、要するにサブジェクトライブラリアンの問題、専門的な知識がどういうふうに図書館の情報サービスに必要なのかということで、いろいろ議論があったわけ

ですが、私の個人的な例をお話ししますと、私はこのライブラリーで建築というサブジェクトを担当しております。ですが、私は自分のメジャーとしては建築の中でも建築の歴史が専門ですので、いろんなレファレンスサービスなり、あるいは情報サービスをするときに、建築史であれば、これは私は自分ひとりで全部、そういう情報サービスができるわけです。

ですけれども、例えば私に構造力学のレファレンスが院生から来たとします。そうした場合には、私は建築の歴史をやる者として建築の構造力学の一応の知識は持っていますから、それに関する情報サービスには応ずることができそうですが、構造力学でも非常に高度な情報になりますと、私の手には負えなくなるわけです。

しかし、私は建築の専門家ですから、どこのボタンを押せばその構造力学の高度な問題に関する答えが出てくるかということは知っています。それは私の同僚であってもいいわけですし、学会であってもいいわけですし、あるいはデータベースであってもいいということなんです。

ですから、そういう意味で自分の専門の知識を持った上で、自分のメジャーにおいてジェネラルな知識を持っている。そのことによって情報を適宜サービスできるようなサービス能力を持つことが、サブジェクトライブラリアンとしての一番大切なことなんじゃないかと思うわけです。

それで、まさに先ほど細野先生が言われた知識をどう使うかということが問題なんだということが一番、我々の職務に妥当しているような気がいたします。

ウェルシュ もう、私の議論は以上で終わりました。あなたは専門家です。どのボタンを押すか、それが一番大事なことです。竺先生、非常に謙虚でいらっしゃるけれども、あなたのお答えがそれですべてです。

これからはデータベースの知識も重要

三輪眞木子(株エポック リサーチ) 今のお話

を伺っていて、ライブラリーの外にいる人間として非常に興味を持ちました。実は私、今、科学技術関係の情報の流通のことでプロジェクトにかかわっておりまして、科学技術分野の情報を扱う専門家をどうやって育てていったらいいかということなどを議論しているのですが、その場所で、いわゆるライブラリアンの教育を受けた人にサブジェクト・スペシャリティーの教育をするのがいいのか、あるいはスペシャリティーの教育を受けた人にライブラリアンの教育をすればいいのかということが、やはり同じように話題になっております。

実際に産業界では、やはり専門知識を持っている人にインフォメーションを扱うノウハウを身につけたという人材が求められています。確かに先ほどおっしゃったように非常に専門的になってきているわけです。

逆に現在の図書館の教育といいますのは、これは日本の場合なんです、幅広くいろいろな分野の情報の扱い方を身につけていらっしゃる。確かに情報をかなり幅広く扱っているんですが、現時点ではやはりどちらかというと、文献といいますか文字の形で流通する情報にかなり集中しているわけです。

それに対して今この情報化社会の中で、先ほども出ていましたが、あらゆるメディアのものが対象になってきている。例えばデータベースをつくるとか、それからデータベースを使うといったときに、文字の情報のデータベースであれば恐らくライブラリアンの教育の中で十分間に合うと思うんですが、それを一歩跳び越して、データリトリバルとかデータアナリシスとか、そういった段階までいきますと、やはりかなり専門的なことが必要になるんじゃないでしょうか。

ますますこれからそういった幅が広がっていくでしょうし、むしろ今考えなければいけないのは、それぞれのライブラリーがどこの範囲までのサービスをするべきかということと、それからライブラリーの中ですべてを解決しようとするのではなくて、ライブラリー以外の例えばワールド・データ・センターだとかあるいは、スペシャル・ライ

ブラリー・インフォメーション・センターといったところの有料のサービスをいかに上手に使って、最終的にユーザが、受益者負担というある程度のコストを払ってでも、自分のニーズに見合った情報が欲しいというときに、最も適切な情報源に最終的にたどり着けるということであって、それがライブラリーの窓口としての役割としては一番重要なんじゃないでしょうか。

そのときにやはりジェネラリストも必要であろうし、スペシャリストも必要なんでしょうが、もう一つそのアウトサイドにスペシャル・インフォメーション・サービスというのがさらにあるんじゃないかということを、ちょっと申し上げたいと思います。

ウェルシュ ライブラリアンについての私の見方は、ライブラリアンというのはデータベースを知っていなきゃいけないし、ただのものと有料のものとの違いを知っていなければいけないと思います。その受益者負担という点については、実際にはなかなかまだ答えの出ない難しい問題もありますが、しかしライブラリアンの役割はそういったリンク、結びつきを情報の形で提供することです。これは転換できる形の情報であるのかどうか、そしてどれが有料であるのかを知っていなければなりません。そしてユーザにこれを伝達してあげなければいけません。

例えば医学の場合がいい例です。あるお医者さんが、外科手術をやっている途中で何か問題に会ったというときに、MEDLINEとかMEDLARSを検索するかわりに、その分野の専門の医者の友達に電話をするでしょうね。そういったような場合に、我々ライブラリアンとしてはコミュニケーションの手段にどういうものがあるかをよく承知していて、我々にアクセスができるようにしてあげたいと思います。TOXLINEというのはデータベースで、医療保健関係者はよく知っています。活字でないデータベースがどんどん使われるようになっており、いろいろな場合にデータベースから答が得られるようにだんだんなっています。

ライブラリアンの役割としては、いわば中央的な情報をデポジトリ、保持している役割の人ということになるでしょうね。

司会 先生、どうもありがとうございました。活発な意見がたくさん出ておりまして、まだまだ質問が出ておりますが、時間が参りましたので、残念ですが、ここで終りたいと思います。

それでは最後に、大変貴重なトピックス並びにお話を賜りましたウェルシュ先生に、もう一度感謝の意を表して拍手を捧げたいと思います。

(文責 本誌編集委員会)

この講演の本誌掲載に当たりましては、金沢工業大学ライブラリーセンター館長酒井悌氏ならびに事務局の方々に一方ならぬご高配をいただきました。また講師のWelsh氏には、快よく掲載をご承諾いただきました。誌上を借りまして厚く御礼申し上げます。

編集委員会事務局